

看護信念対立の内省的記述に対する批評活動を通じたメタ思考スキル学習 Learning Meta-thinking Skill through Reviewing Experiences on Reflective Description of Nursing Belief Conflict

西山 大貴^{*1} 叶 秀征^{*2} 田中 孝治^{*3}
 Hirotaka NISHIYAMA^{*1} Hideyuki KANO^{*2} Koji TANAKA^{*3}
 松田 憲幸^{*4} 崔 亮^{*3} 陳 巍^{*1} 池田 満^{*13}
 Noriyuki MATSUDA^{*4} Liang CUI^{*3} Wei CHEN^{*1} Mitsuru IKEDA^{*13}

^{*1} 北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科
^{*1} School of Knowledge Science, Japan Advance Institute of Science and Technology
^{*2} 和歌山大学大学院 システム工学研究科
^{*2} Graduate School of Systems Engineering, Wakayama University
^{*3} 北陸先端科学技術大学院大学サービスサイエンス研究センター
^{*3} Research Center for Service Science, Japan Advance Institute of Science and Technology
^{*4} 和歌山大学システム工学部
^{*4} Faculty of Systems Engineering, Wakayama University
 Email: nishiyama-hirotaka@jaist.ac.jp

あらまし：看護現場で起こる信念対立を適切に解消し、知識創造に繋げるためのメタ思考スキル教育が求められている。本稿では、看護信念対立場面での思考プロセスを表現する内省的記述を批評する経験を積むことで、メタ思考スキルの学習を促す教育プログラムについて考察する。

キーワード：メタ思考、動機づけ、看護サービス、信念対立

1. はじめに

近年、患者中心医療の実現に向けたチーム医療が推進されている。チーム医療では、医療者や患者及びその家族といった異なる立場の関係者が抱える多様な医療ニーズの対立が指摘されている。対立の根源的な原因が信念対立⁽¹⁾である。チーム医療では、関係者が互いの立場を認識し、異なる立場の考え方について考えることで、信念対立を乗り越え、知識を共創することが求められる。こうした背景から、チーム医療において関係者間の調整を図る役割⁽²⁾を担う看護師の対人コミュニケーションスキル、なかでも自己や他者の“考え方について考えるスキル”の学習を促す教育が必要だと考えられる。こうしたスキルのことをメタ思考スキルと呼ぶこととする。

メタ思考スキル教育を困難にする要因として、学習対象である思考の暗黙性の高さと、それに起因する学習法の不透明さがある。本研究では、看護現場における信念対立に直面した際の思考結果を、看護信念対立の内省的記述として明示化する。学習者は他者が記述した内省的記述について問題点を指摘し、その問題解決のための助言を与える批評経験を積むことで、その経験からメタ思考スキルについて学習する。本稿では、看護信念対立の内省的記述に対する批評活動を通じたメタ思考スキルの学習を促す教育プログラムについて述べる。

2. 看護思考法研修

筆者らは大学病院と連携して、看護師のメタ思考

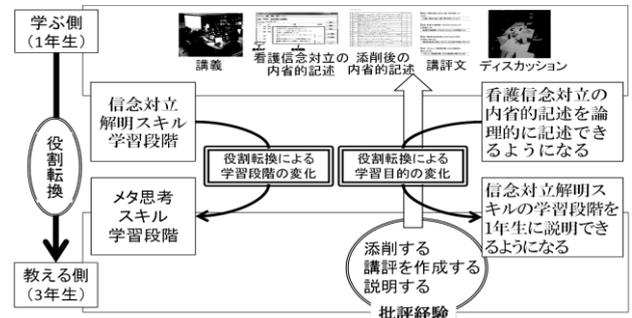


図1 メタ思考スキル教育プログラム

スキルの向上を目的としたメタ思考スキル教育プログラム(図1)を実施してきた。このプログラムの基本的なアイデアは、メタ思考スキルの学習を分解し、各段階の学習に適切な支援を提供することである。学習段階は、研修参加1年目の学習者(1年生)が看護信念対立の内省的記述を通じて信念対立解明スキルを学習する段階と、研修参加3年目の学習者が、1年生が記述した内省的記述について批評する活動を通じてメタ思考スキルを学習する段階に分解している。プログラムに参加する学習者は、自身の学習段階に応じて、信念対立解明スキルを学ぶ側と教える側という二つの役割を担う。メタ思考スキル教育では、学習対象が思考という暗黙性の高いものであるため、講義などで知識として学習者に直接的に伝えることは難しい。そのため、この教育プログラムでは1年生が記述した看護信念対立の内

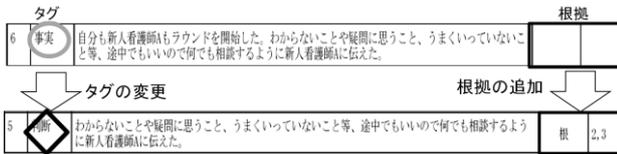


図 2 具体的な添削の事例

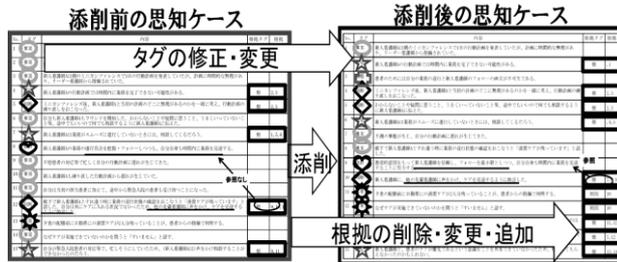


図 3 タグの変更と根拠の追加の事例

省的記述を批評する活動を通じて、3年生に思考のモニタリングやコントロールを行う経験を積ませることで、メタ思考スキルの学習を促す。本稿では、3年生の批評活動の添削と講評について説明する。

3. メタ思考スキル学習段階

3.1 看護信念対立の内省的記述の添削

3年生は、1年次の信念対立解明スキル学習段階で学習した内省的記述法についての知識をもとに、1年生が記述した内省的記述の問題点を発見し、修正する。具体的な添削事例を図2に示す。添削前は、「…何でも相談するように伝えた」という行動に関する判断が記述され、その記述の論理的役割を表すタグとして事実が設定されている。事実タグは、実際に観察された、他の記述に論理的に依存せずに成立する記述に付与されるものである。3年生は、この記述は、1年生が行った判断を記述していると考え、事実タグを判断タグに変更し、その根拠となる他の記述を根拠として参照するように添削している。

図3は、添削の全体を示しており、他にも、タグの変更・根拠の追加が行われていることがわかる。

3.2 看護信念対立の内省的記述の講評

添削を終えた3年生は、批評支援システム⁽³⁾を使って1年生が記述した内省的記述についての講評文(図4)を作成する。講評文は「講評の概要」、「知識の教示」、「一般的なコメント」、「具体的なコメント」という4つのパラグラフで構成されており、「講評の概要」で示した内容について、他の3つのパラグラフで重要なポイントを列挙する内容となっている。「講評の概要」では1年生が記述した内省的記述の具体的な問題点を指摘し、その問題が発生する原因の理解や問題自体の解決のための助言を行い、問題解決後の効果などについて説明する。この指導方略は、自らの思考を言語化し、他者に説明することができる熟練の思考指導者の教授方略を参考にして構成している。講評文の作成は簡単ではないが、3

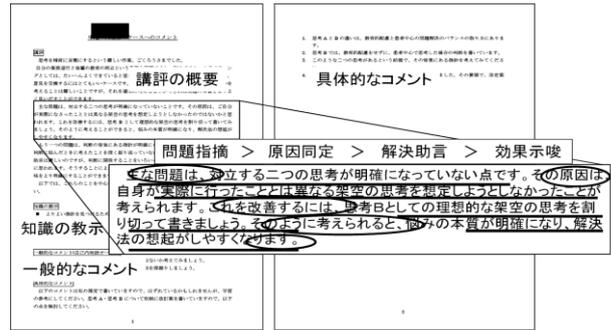


図 4 具体的な講評文の例

年生が信念対立解明スキルを1年生に教える役割を適切に担い、その経験からメタ思考スキルを学ぶことができるように、添削の思考表現語彙と指導方略を提供する批評支援システム⁽³⁾を開発している。

3.3 批評活動を通じたメタ思考スキルの学習

本研究のメタ思考スキル教育プログラムにおいて、3年生は批評活動の中で、信念対立解明スキルの学習を1年生に説明することが求められる。これは、説明を考えさせることを通じて、熟練の思考指導者と同じように、自身や他者の思考について考え、説明させることでメタ思考スキルの学習を促す意図がある。3年生は自身の過去の信念対立解明スキルの学習をもとに、後輩である1年生が抱える信念対立解明スキルの学習上の困難を、1年生が記述した内省的記述から推測し、問題を解決するための助言を行う。内省的記述には、1年生の看護信念対立場面における思考結果が記述されているため、内省的記述の問題点を指摘する行為は思考のモニタリングに、問題解決のための助言を行う行為は思考のコントロールに相当する。

3年生にメタ思考スキルの学習を促すために、批評を通じて1年生の信念対立解明スキルの学習過程についての説明を考えさせることで、思考のモニタリングやコントロールの経験を積ませることが本教育プログラムの設計意図である。

4. まとめ

本稿では、メタ思考教育プログラムにおいて3年生が、看護信念対立の内省的記述について批評する活動が、メタ思考スキルの重要な認知活動である思考のモニタリングとコントロールの学習に繋がることについて考察した。

参考文献

- (1) 京極真: “医療関係者のための信念対立解明アプローチ-コミュニケーションスキル入門”, 誠心書房 (2011)
- (2) 富田倫子, 坂本すが: “看護師の立場から(<特集>外科領域におけるコメディカルとの役割分担-現状と未来)” 日本外科学会雑誌, Vol.11, No.4, pp.220-225 (2010)
- (3) 叶, 西山, 田中, 崔, 松田, 三浦, 瀧: 看護における考え方の指導のための添削システム, 第29回教育システム情報学会全国大会(本大会), 発表予定 (2014)